

文鳥

夏目漱石



一冊堂青安文庫

文鳥

夏目漱石

十月早稲田に移る。伽藍のような書齋にただ一人、片づけた顔を頬杖で支えていると、三重吉が来て、鳥を御飼いなさいと云う。飼ってもいいと答えた。しかし念のためだから、何を飼うのかねと聞いたら、文鳥ですと云う返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て来るくらいだから奇麗な鳥に違なかうと思つて、じゃ買つてくれたまえと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼いなさいと、同じような事を繰り返している。うむ買うよ買うよとやはり頬杖を突いたままで、むにやむにや云つてうちに三重吉は黙つてしまった。おおかた頬杖に愛想を尽かしたんだろうと、この時始めて気がついた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買いなさいと云いだした。これも宜しいと答えると、是非御買いなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釈を始めた。その講釈はだいぶ込み入ったものであつたが、気の毒な事に、みんな忘れてしまった。ただ好いのは二十円ぐらいすると云う段になつて、急にそんな高価でなくつても善かろうと云つておい

た。三重吉はにやにやしている。

それから全体どこで買うのかと聞いて見ると、なにどこの鳥屋にでもありますと、実に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なにどこにかあるでしょう、とまるで雲を攫つかむような寛大な事を云う。でも君あてがなくなつちやいけなかりうと、あたかもいけないような顔をして見せたら、三重吉は頬ほぺたへ手をあてて、何でも駒込に籠の名人があるそうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんが、非常に心細くなつてしまった。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、さつそく万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金はたしかに出した。三重吉はどこで買ったか、七子ななこの三つ折みおれの紙入を懐中していて、人の金でも自分の金でも悉しっ皆この紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札をたしかにこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

かようにして金はたしかに三重吉の手に落ちた。しかし鳥と籠かごとは容易にやつて来ない。

そのうち秋が小春こはるになった。三重吉はたびたび来る。よく女の話などをして帰って行

く。文鳥と籠の講釈は全く出ない。硝子戸ガラスドを透すかして五尺の縁側えんがわには日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据すえてやったら、文鳥も定めし鳴き善よかろうと思うくらいであつた。

三重吉の小説によると、文鳥は千代ちよ千代と鳴くそうである。その鳴き声がだいぶん気に入つたと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使っている。あるいは千代と云う女に惚ほれていた事があるのかも知れない。しかし当人はいつこうそんな事を云わない。自分も聞いてみない。ただ縁側に日が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜しもが降り出した。自分は毎日伽藍がらんのような書斎に、寒い顔を片づけてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたりやめたりして暮くしていた。戸は二重にじゆうに締め切つた。火鉢ひばちに炭ばかり継ついでいる。文鳥はついに忘れた。

ところへ三重吉が門口かどぐちから威勢よく這入はいつて来た。時は宵よいの口くちであつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳かざして、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になつた。三重吉は豊隆ほうりゆうを従えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持つている。その上に三重吉が大きな箱を兄あにき分ぶんに抱かかえている。五円札が文鳥と籠と箱になつたのはこの初冬はつふゆの晩であつた。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋灯ランブをもっとこっちへ出せなどと云う。そのくせ寒いので鼻の頭が少し紫色むらさきいろになっている。

なるほど立派な籠かごができた。台が漆うるしで塗ぬつてある。竹は細く削けずつた上に、色が染ぞつてある。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云っている。豊隆はうん安いと云っている。自分は安いか高いか判然わかんと判らないが、まあ安いなあと云っている。好いものになると二十円もするそうですと云う。二十円はこれで二返目にへんめである。二十円に比べて安いのは無論である。

この漆はね、先生、日向ひなたへ出して曝さらしておくうちに黒味くろみが取れてだんだん朱しゆの色が出て来ますから、——そうしてこの竹は一返善いっぺんく煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、綺麗きれいでしょうと云っている。

なるほど奇麗だ。次の間まへ籠かごを据つぎえて四尺ばかりこっちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にうづくまつていなければ鳥とは思えないほど白い。何だか寒そうだ。

寒いだろうねと聞いてみると、そのために箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱

に入れてやるんだと云う。籠かごが二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々行水ぎょうすいを使わせるのだと云う。これは少し手数てすうが掛るなと思つてみると、それから糞ふんをして籠かごを汚よごしますから、時々掃除そうじをしておやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥のためにはなかなか強硬である。

それをはいいい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟あわを一袋出した。これを毎朝食わせなくつちやいけません。もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えつぼを出して殻からだけ吹いておやんなさい。そうしないと文鳥が実みのある粟を一々拾い出さなくつちやなりません。水も毎朝かえておやんなさい。先生は寝坊だからちようど好いでしょうと大変文鳥に親切を極きわめている。そこで自分もよろしいと万事受合うあつた。ところへ豊隆が袂たもとから餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。こういっさい万事を調しらえておいて、実行を逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心ではよほど覺束おぼつかなかつたが、まずやってみようとまでは決心した。もしできなければ家のものうちものが、どうかするだろうと思つた。

やがて三重吉は鳥籠ていねいを叮嚀がらんに箱の中へ入れて、縁側えんがわへ持ち出して、ここへ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍がらんのような書齋の真中に床を展のべて冷ひやかに寝た。夢に文鳥

を背負い込んだ心持は、少し寒かったが眠ってみれば不断の夜のごとく穏かである。

翌朝眼が覚めると硝子戸に日が射している。たちまち文鳥に餌をやらなければならぬなと思つた。けれども起きるのが退儀であつた。今にやろう、今にやろうと考えているうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないから顔を洗うついでをもつて、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて鳥籠を明海へ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もつと早く起きたかつたらうと思つたら氣の毒になつた。

文鳥の眼は真黒である。瞼の周囲に細い淡紅色の絹糸を縫いつけたような筋が入っている。眼をぱちつかせるたびに絹糸が急に寄つて一本になる。と思うとまた丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据えた。文鳥はぱつと留り木を離れた。そうしてまた留り木に乗つた。留り木は二本ある。黒味がかつた青軸をほどよき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえた足を見るといかにも華奢にできている。細長い薄紅の端に真珠を削つたような爪が着いて、手頃な留り木を甘く抱え込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥はすでに留り木の上で方向を換えていた。しきりに首を左右

に傾ける。傾けかけた首をふと持ち直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根がまたちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗いに風呂場へ行つた。歸りに台所へ廻つて、戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、また書斎の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕叮嚀に餌をやる時の心得を説明して行つた。その説によると、むやみに籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へあてがって、外から出口を塞ぐようにしなくては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならない。とその手つきまでして見せたが、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事ができるのか、つい聞いておかなかつた。

自分はやむをえず餌壺を持ったまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振り返つた。そうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の処置に窮した。人の隙を窺つて逃げるような鳥とも見

えないので、何となく気の毒になった。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏はばたきを始めた。細く削けずった竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶほどに翼つばさを鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭いやになった。栗あわの壺と水の壺を留り木の間にようやく置くや否や、手を引き込ました。籠の戸ははたりと自然ひとりでに落ちた。文鳥は留り木の上に戻った。白い首を半ば横なかに向け、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直まっすぐにして足の下もとにある栗と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行った。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。飯と飯の間はたいい机に向つて筆を握っていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事ができた。伽藍がらんのような書斎へは誰も這入はいつて来ない習慣であつた。筆の音に淋さびしさと云う意味を感じた朝も昼も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がぴたりとやむ、またやめねばならぬ、折もだいぶあつた。その時は指の股またに筆を挟はさんだまま手の平ひらへ顎あごを載せて硝子越ガラスごしに吹き荒れた庭を眺めるのが癖くせであつた。それが済むと載せた顎を一応撮つまんで見る。それでも筆と紙がいっしょにならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸のして見る。すると縁側えんがわで文鳥がたちまち千代千代ちよと二声鳴いた。

筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木の上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代と云った。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思うほどな美しい声で千代と云った。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、きっと鳴きますよ、と受合つて歸つて行つた。

自分はまた籠の傍へしゃがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度豎横に向け直した。やがて一団の白い体がぼいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗な足の爪が半分ほど餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りそんな餌壺は釣鐘のように静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のような気がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。そうして二三度左右に振つた。奇麗に平して入れてあつた粟がはらはらと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。また嘴を粟の真中に落す。また微かな音がする。その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。輩ほどな小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の碁石でもつづけ様に敲いているような気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅のようである。その紅がしだいに流れて、粟をつつく口尖の辺は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が粟の中へ這入る時は非常

に早い。左右に振り^ま蒔く粟の珠も非常に軽そうだ。文鳥は身を逆^{さか}さまにしないばかりに尖^{とが}った嘴を黄色い粒の中に刺し込んで、膨^ふくらんだ首を惜^{おし}気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌^え壺だけは寂^{せき}然として静かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分ほどだと思う。

自分はそつと書齋へ帰って淋^{さび}しくペンを紙の上に走らしていた。縁^{えん}側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代千代とも鳴く。外では木^こ枯^{から}が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の縁^{ふち}へ懸^かけて、小^ちい嘴に受けた一^{ひと}雫^{ずく}を大事そうに、仰^あ向^{おも}いて吞^のみ下^{くだ}している。この分では一杯の水が十日ぐらい続くだろうと思つてまた書齋へ歸った。晩には箱へしまつてやつた。寝る時硝^{ガラス}子戸から外を覗^{のぞ}いたら、月が出て、霜^{しも}が降っていた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明^ある日^ひもまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやつたのは、やつぱり八時過ぎであつた。箱の中ではとうから目が覚^さめていたんだろう。それでも文鳥はいっこう不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔^{むか}し美しい女を知っていた。この女が机に凭^{もた}れて何か考えているところを、後^{うしろ}から、

そつと行つて、紫の帶上げおびあの房ふさになつた先を、長く垂らして、頸筋くびすじの細いあたりを、上から撫なで廻まわしたら、女はものう氣けに後を向いた。その時女の眉まゆは心持八の字に寄つていた。それで眼尻と口元には笑が萌きざしていた。同時に恰好かつごうの好い頸を肩まですくめていた。文鳥が自分を見た時、自分はふとこの女の事を思い出した。この女は今嫁に行つた。自分が紫の帶上でいたずらをしたのは縁談のきまつた二三日後あとである。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。しかし殻からもだいぶ混つていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛いたく濁つていた。易かえてやらなければならぬ。また大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにもかかわらず、文鳥は白つばい翼を乱して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥にすまないと思つた。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯がどこかへ持つて行つた。水も易かえてやつた。水道の水だから大變冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代千代と云う声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。しかし縁側えんがわへ出て見ると、二本の留とまり木の間を、あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、絶間たえまなく行きつ戻りつしてゐる。少しも不平らしい様子はなかつた。

夜は箱へ入れた。明る^{あき}る朝目^{あさめ}が覚^さめると、外は白い霜^{しも}だ。文鳥も眼が覚^さめているだろうが、なかなか起きる気にならない。枕元にある新聞を手取るさえ難儀^{なんぎ}だ。それでも煙草^{たばこ}は一本ふかした。この一本をふかしてしまつたら、起きて籠から出してやろうと思ひながら、口から出る煙^{けぶり}の行方^{ゆくえ}を見つめていた。するとこの煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉^{まゆ}を寄せた昔の女の顔がちよつと見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織^{はおり}を引掛^{ひっか}けて、すぐ縁側へ出た。そうして箱の蓋^{ふた}をはずして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら千代千代と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴^なれるにしたがつて、文鳥が人の顔を見て鳴くようになるんだそうだ。現に三重吉の飼つていた文鳥は、三重吉が傍^{そば}にいさえすれば、しきりに千代千代と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌^えを食べると云う。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

次の朝はまた怠^{なま}けた。昔の女の顔もつい思ひ出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気がついたように縁側^{えんがわ}へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留^{とま}り木^きの上を面白そうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸^のして籠の外を下の方から覗^{のぞ}いている。その様子がなかなか無邪気である。

昔紫の帶上^{おびあげ}でいたずらをした女は襟^{えり}の長い、背のすらりとした、ちよつと首を曲げて人を見る癖^{くせ}があつた。

粟^{あわ}はまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は粟も水も易^かえずに書齋へ引込^{ひっこ}んだ。

昼過ぎまた縁側へ出た。食後の運動かたがた、五六間の廻り縁を、あるきながら書見するつもりであつた。ところが出て見ると粟がもう七分がた尽きている。水も全く濁つてしまつた。書物を縁側^{ぼう}へ抛り出しておいて、急いで餌^えと水を易えてやつた。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食うまでは縁側を覗かなかつた。書齋に帰つてから、あるいは昨日^{きのう}のように、家人^{うちのもの}が籠を出しておきはせぬかと、ちよつと縁へ顔だけ出して見たら、はたして出してあつた。その上餌も水も新しくなつていた。自分はやつと安心して首を書齋に入れた。途端^{とたん}に文鳥は千代千代と鳴いた。それで引込^{ひっこ}めた首をまた出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。けげんな顔をして硝子越^{ガラスこし}に庭の霜^{しも}を眺めていた。自分はどうとう机の前に歸つた。

書齋の中では相変らずペンの音がさらさらする。書きかけた小説はだいぶんはかどつた。指の先が冷たい。今朝埋^いけた佐倉炭^{さくらすすみ}は白くなつて、薩摩五徳^{さつまごたく}に懸^かけた鉄瓶^{てつびん}がほとん

ど冷めている。炭取は空だ。手を敲いたがちよつと台所まで聴えない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上にじつと留っている。よく見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からごんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片づいている。

自分は不思議に思った。文鳥について万事を説明した三重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰った時、文鳥の足はまだ一本であった。しばらく寒い縁側に立つて眺めていたが、文鳥は動く気色もない。音を立てないで見つめていると、文鳥は丸い眼をしだいに細くし出した。おおかた眠たいのだろうと思つて、そつと書斎へ這入ろうとして、一歩足を動かすや否や、文鳥はまた眼を開いた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉てて火鉢へ炭をついだ。

小説はしだいに忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてから、何だか自分の責任が軽くなつたような心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分はただ文鳥の声を聞くだけが役目ようになった。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留^{たちどま}って文鳥の様子を見た。たいていは狭い籠を苦^くにもしないで、二本の留り木を満足そうに往復していた。天氣の好い時は薄い日を硝子^{ガラス}越に浴びて、しきりに鳴き立てていた。しかし三重吉の云ったように、自分の顔を見てことさらに鳴く気色はさらになかった。

自分の指からじかに餌^えを食うなどと云う事は無論なかった。折々機嫌^{きげん}のいい時は麵^{めん}麩^ふの粉^こなどを人指^{ひとさし}指^{ゆび}の先へつけて竹の間からちよつと出して見る事があるが文鳥はけつして近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼^{つばさ}を乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであった。二三度試みた後^{のち}、自分は氣の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまった。今の世にこんな事のできるものがあるかどうかはなはだ疑わしい。おそらく古代の聖徒^{せいんと}の仕事だろう。三重吉は嘘^{うそ}を吐いたに違ない。

或日の事、書齋で例のごとくペンの音を立てて侘^わびしい事を書き連ねていると、ふと妙な音が耳に這^{はい}入った。縁側でさらさら、さらさら云う。女が長い衣^{きぬ}の裾^{すそ}を捌^{さば}いているようにも受取られるが、ただの女のそれとしては、あまりに仰山^{ぎやうさん}である。雛段^{ひなだん}があるく、内裏^{だいり}雛^{ひな}の袴^{はかま}の襷^{たす}の擦れる音とでも形容したらよかろうと思った。自分は書きかけた小説をよそにして、ペンを持ったまま縁側へ出て見た。すると文鳥が行水^{ぎやうすい}を使つてい

た。

水はちようど易え立てであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛まで浸して、時々
は白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にしやがむように腹を押しつけつつ、総
身の毛を一度に振っている。そうして水入の縁にひよいと飛び上る。しばらくしてまた
飛び込む。水入の直径は一寸五分ぐらいに過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余
り、背は無論余る。水に浸かるのは足と胸だけである。それでも文鳥は欣然として行水
を使っている。

自分は急に易籠を取つて来た。そうして文鳥をこの方へ移した。それから如露を持つ
て風呂場へ行つて、水道の水を汲んで、籠の上からさあさあとかけてやった。如露の水
が尽きる頃には白い羽根から落ちる水が珠になつて転がった。文鳥は絶えず眼をぱちぱ
ちさせていた。

昔紫の帶上でいたずらをした女が、座敷で仕事をしていた時、裏二階から懷中鏡で女
の顔へ春の光線を反射させて楽しんだ事がある。女は薄紅くなつた頬を上げて、繊い手
を額の前に翳しながら、不思議そうに瞬をした。この女とこの文鳥とはおそらく同じ心
持だろう。

日数^{ひかず}が立つにしたがつて文鳥は善く囀^{さえず}ずる。しかしよく忘れられる。或る時は餌壺^{えつぼ}が粟^{あわ}の殻^{から}だけになっていた事がある。ある時は籠^{かご}の底^{ふん}が糞^{ふん}でいっぱいになっていた事がある。ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子^{ガラス}越しに差し込んで、広い縁側^{えんがわ}がほの明るく見えるなかに、鳥籠^{とま}がしんとして、箱の上に乗っていた。その隅^{すみ}に文鳥の体が薄白く浮いたまま留^{とま}り木^ぎの上に、有るか無きかに思われた。自分は外套^{がいとう}の羽根^{はね}を返して、すぐ鳥籠^{とま}を箱のなかへ入れてやった。

翌日文鳥は例のごとく元氣よく囀^{さえず}っていた。それから時々寒い夜^{よる}も箱にしまつてやるのを忘れることがあつた。ある晚いつもの通り書斎で専念にペンの音を聞いていると、突然縁側の方でがたりと物の覆^{くつがえ}った音がした。しかし自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立つて行って、何でもないといまいましいから、気にかからないではなかつたが、やはりちよつと聞耳^{ききみみ}を立てたまま知らぬ顔ですましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであつた。便所に行ったついで、気がかりだから、念のため一応縁側へ廻つて見ると――

籠は箱の上から落ちてゐる。そうして横に倒れてゐる。水入^{みずいれ}も餌壺^{えつぼ}も引繰返^{ひっくりかえ}つてゐる。粟^{あわ}は一面に縁側に散らばつてゐる。留^{とま}り木は抜け出している。文鳥はしのびやかに

鳥籠さんの棧さんにかじりついてた。自分は明日あしたから誓ちかつてこの縁側えんがわに猫を入れまいと決心した。

翌日あくるひ文鳥は鳴かなかつた。粟やまもりを山盛やまもり入れてやった。水を漲みなぎるほど入れてやった。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動かかなかつた。午飯ひるめしを食ってから、三重吉に手紙を書こうと思つて、二三行書き出すと、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥がまたちちと鳴いた。出て見たら粟も水もだいぶん減っている。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

翌日よくじつ文鳥がまた鳴なくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹を圧おしつけていた。胸の所が少し膨ふくらんで、小さい毛が漣さざなみのように乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来てくれと云う手紙を受取つた。十時までにと云う依頼であるから、文鳥をそのままにしておいて出た。三重吉に逢あつて見ると例の件がいろいろ長くなって、いっしょに午飯を食う。いっしょに晩飯ばんめしを食う。その上明日あす日の会合まで約束して宅うちへ歸つた。歸つたのは夜の九時頃である。文鳥の事はすっかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ這入はいつて寝てしまつた。

翌日あくるひ眼が覚めるや否や、すぐ例の件を思い出した。いくら当人が承知だつて、そんな

所へ嫁にやるのは行末ゆくすえよくあるまい、まだ子供だからどこへでも行けと云われる所へ行く気になるんだらう。いったん行けばむやみに出られるものじゃない。世の中には満足しながら不幸に陥おちいつて行く者がたくさんある。などと考えて楊枝ようじを使つて、朝飯を済ましてまた例の件を片づけに出掛けて行つた。

歸つたのは午後三時頃である。玄関へ外套がいとうを懸かけて廊下伝いに書齋へ這入はいるつもりで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反そつ繰くり返つていた。二本の足を硬く揃そろえて、胴と直線に伸ばしていた。自分は籠の傍わきに立つて、じつと文鳥を見守つた。黒い眼を眠ねぶつている。瞼まぶたの色は薄蒼うすあおく變つた。

餌壺えつぼには粟あわの殻からばかり溜たまつてゐる。啄ついばむべきは一粒もない。水入は底の光るほど濁かれている。西へ廻つた日が硝子戸ガラスどを洩れて斜めに籠に落ちかかる。台に塗つた漆うるしは、三重吉の云つたごとく、いつの間にか黒味が脱ぬけて、朱しゆの色が出て來た。

自分は冬の日に色づいた朱の台を眺めた。空からになつた餌壺を眺めた。空むなしく橋を渡している二本の留り木を眺めた。そうしてその下に横よこたわる硬い文鳥を眺めた。

自分はこごんで両手に鳥籠かかを抱えた。そうして、書齋へ持つて這入はいつた。十畳の真中へ鳥籠おろを卸して、その前へかしこまって、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を

握やわらつて見た。柔やわらかい羽根は冷ひえきつている。

拳こぶしを籠かごから引き出して、握にぎつた手を開けると、文鳥は静しずに掌てのひらの上にある。自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見つめていた。それから、そつと座布団ざぶとんの上に卸おろした。そうして、烈はげしく手を鳴らした。

十六になる小女こおんなが、はいと云つて敷居しきい際に手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握にぎつて、小女の前へ抛ほうり出した。小女は俯向うつむいて畳を眺めたまま黙もつてゐる。自分は、餌えをやらないから、とうとう死んでしまったと云いながら、下女の顔を睥にらめつけた。下女はそれでも黙もつてゐる。

自分は机の方へ向き直つた。そうして三重吉へ端書はがきをかいだ。「家人うちのものが餌をやらないものだから、文鳥はどうとう死んでしまった。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌をやる義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」と云う文句であつた。

自分は、これを投函だして来い、そうしてその鳥をそつちへ持つて行けと下女に云つた。下女は、どこへ持つて参りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持つて行けと怒どりつけたら、驚ないて台所の方へ持つて行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋うめるんだ埋るんだと騒いでゐる。庭掃除にわそうじに頼たのん

だ植木屋が、御嬢さん、ここいらが好いでしょうと云っている。自分は進まぬながら、書斎でペンを動かしていた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつてようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日植木屋の声のしたあたりに、小さい公札が、蒼い木賊の一株と並んで立っている。高さは木賊よりもずっと低い。庭下駄を穿いて、日影の霜を踏み碎いて、近づいて見ると、公札の表には、この土手登るべからずとあった。筆子の手蹟である。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想な事を致しましたとあるばかりで家人が悪くとも残酷だともいっこう書いてなかった。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
